

ペルシア帝国銀行史研究序説

水田正史

目次

はじめに

I 設立

II 取締役会の構成

III 展開

おわりに

はじめに

1889年、イギリスの海外銀行 (Overseas Bank)¹⁾であるペルシア帝国銀行 (Imperial Bank of Persia)²⁾が設立された。

この銀行は、テヘラーン³⁾に本店を、イラン国内各地に支店を置き、独占的発券権をもつなど⁴⁾、イランの中央銀行としての機能を備えていた。また、イラン政府のためにたびたび巨額の借款に応じるなど、同行を抜きにして19世紀後半から20世紀初頭にかけてのイラン経済史を語ることはできないであろう。

事実、これまで多くの経済史研究が同行に言及している。

1) Pressnell & Orbell [31], pp. 18-19.

2) イランではこの銀行は Bank-e Shāhanshāhi-ye Irān (イラン帝国銀行) と呼ばれている。日本ではペルシア (あるいはペルシャ) 帝国銀行という訳語が一般的なので、本稿でもこの慣例に従うことにする。

なお、イランとペルシアについてであるが、前者は自称であり、後者は古代ギリシア以来のヨーロッパからの他称である (岡崎 [29], 4-5ページ)。本稿ではイランという呼称を用いることにする。ただし、ペルシアに対応する Persia などの語が用いられている欧文史料を訳出し抜粋する場合には、ペルシアという訳語を当てることもある。

3) ペルシア語の仮名表記は岡崎 [28] に従った。ただし、慣用として定着しているものについてはこの限りではない。

4) “Foreign Office Records” [11], F. O. 881/5808.

それらの研究は、大別すれば、ペルシア語史料の読解を踏まえたイラン史プロバターの研究者によるアプローチと、ヨーロッパ諸国の金融資本の世界的活動に焦点を当てた国際経済史や国際金融史などの分野の研究者によるアプローチとに分けることができよう。

前者では、同行はタバコ・ボイコット運動⁵⁾などの文脈の中でイラン政府の借款問題などが簡単に触れられている程度であり、同行が主題として取り上げられた研究は管見の限り皆無である。

一方、後者においても十分な研究がなされてきたとはいいがたい。ペルシア語史料を利用していないという点がこれらの研究者を制約する最大の要因の1つであった。ただし、マクリーン (David McLean) の研究⁶⁾は、このような制約下にあるとはいえ、未公刊史料を駆使した労作であり、同行研究の現在の水準を示すものである。しかし、氏の研究は、同行をめぐるいくつかの重要問題に論点が絞られており、同行の全体像を浮かび上がらせるような性質のものではない。

このように、ペルシア帝国銀行は、その重要性ほどには研究が進んでいないといえる。

次に、同行に対する評価についてみてみよう。

フェイス (Herbert Feis) は同行を「イギリス政府がペルシアにおいてその金融的活動を行なうためのエージェンシー」と位置づけており、バスター (Albert Stephen James Baster) とマクリーンもほぼ同趣旨の評価を下している⁷⁾。

また、ソ連のイラン史家イワノフ (Михаил Сергеевич Иванов) は、同行は「イギリス帝国主義の、イラン隷属化のためのもっとも重要な手段」であった

5) 「イギリス国籍の投機業者タルボットがカージャール朝政府から獲得した、イラン全土におけるタバコの原料買付け・加工・運搬・国内販売・輸出に関する独占的利権に反対して、1891～92年ウラマー・商人層を中心として展開された大衆的抗議運動」(日本イスラム協会監修『イスラム事典』平凡社、1982年、246ページ)。

6) McLean [21]; [22]。

7) Feis [9], p. 362; Baster [4], p. 121 & p. 125; McLean [21], p. 22 & p. 70。

としている⁸⁾。

さらに、イラン人史家テイムリー (Ebrāhīm Teymūrī) は同行を「イギリス大使館の金庫 (khazāne va sandūqkhāne)」と捉えている⁹⁾。

これらの評価が妥当なものなのかどうかを吟味するためには、その前提として、しかるべき基本的史実についての知識が必要であるが、そういう基本的史実をまとめた形で提示してくれるような研究はこれまでにはなかった。具体的には、支店の所在地、その開設年月日、取締役の氏名などのごく基本的なデータさえ、断片的にはともかく、網羅的な形では明らかにされていないというのが現在の研究段階なのである。

本稿では、『バンキング・アルマナク』 (*Banking Almanac* [3])、『バンカーズ・マガジン』 (*Bankers' Magazine* [2]) などの年鑑、雑誌、イギリスの外交文書 (“Foreign Office Records” [11])、それに香港銀行グループ (Hongkong Bank Group) 所蔵のペルシア帝国銀行文書 (“Imperial Bank of Persia Archives” [14]) などに依拠して、若干の基本的史料を示しつつ、設立から第1次世界大戦までの同行の歴史を簡単に跡づけることにしたい。

I 設 立

ロイター通信社の設立者であるジュリアス・ロイター (Paul Julius de Reuter, 1816-1890年) が1872年7月25日にイラン政府より得た利権は、19世紀イラン経済史上たいへん重要な意味をもつものであった¹⁰⁾。

ロイター利権と呼ばれるこの利権は、鉄道敷設、鉱山採掘、銀行開設、運河建設などを含むわめて包括的なものであった。それは、「史上、実現されたことはもちろん、夢想されたことさえなかった、1つの王国の全産業資源の外国への完全にして並はずれた利権譲渡 (surrender)」であり、当時の「ヨーロ

8) Иванов [19], p. 259.

9) Teymūrī [37], p. 209.

10) Curzon [6], Vol. I, p. 480; “Foreign Office Records” [11], F. O. 881/5808; Frechtling [12], pp. 520-521.

ッパにセンセーションを巻き起こした」という¹¹⁾。

この利権は、イラン国内諸勢力やロシアの反対などにより翌年取り消されるが¹²⁾、ロイターにはその補償として1889年1月30日、ペルシア帝国銀行という名の国立銀行（State Bank）をイランに設立する権利が与えられた¹³⁾。

この銀行は、同年8月、イギリスの王室特許状により法人化された¹⁴⁾。バスターによれば、王室特許状による法人化というのは当時としては異例なことで、それは、「このプロジェクトが公的な奨励と是認を与えられていること、ならびに、イギリスのペルシアへの政治的目的をもっての商業的浸透の尖兵たるべく企てられたものであることを強調するため」であった¹⁵⁾。

同年9月19日の取締役会で初代取締役9人が任命され¹⁶⁾、同行は10月23日にテヘラーンにて正式に開業した¹⁷⁾。

なお、同行は、営業を開始するに際して、イランにおける新オリエンタル銀行（New Oriental Bank Corporation）の土地、建物などを20,000ポンドで買収した¹⁸⁾。

新オリエンタル銀行は1888年イランに進出し、テヘラーン、マシュハド（Mashhad）、タブリーズ（Tabriz）、ラシュト（Rasht）、エスファハーン（Esfahān）、シーラーズ（Shirāz）、およびブーシェフル（Būshehr）に支店または代理店を置き、営業を行っていた¹⁹⁾。

ペルシア帝国銀行のテヘラーン本店はトゥープハーネ広場（Meydān-e Tūp-khāne）にあったが、これも元々は新オリエンタル銀行のものであった²⁰⁾。

11) Curzon [6], Vol. I, p. 480.

12) Curzon [6], Vol. I, pp. 482-483 & p. 615; Frechling [12], pp. 526-528.

13) "Foreign Office Records" [11], F. O. 881/5808.

14) Baster [4], p. 120; Curzon [6], Vol. I, p. 475.

15) Baster [4], pp. 120-121.

16) "Imperial Bank of Persia Archives" [14], S24/1.

17) *The Statist*, Vol. XXV, March 29 th, 1890, p. 397; *Bankers' Magazine* [2], Vol. L, May 1890, p. 819.

18) *The Statist*, Vol. XXV, March 29 th, 1890, p. 397; *Bankers' Magazine* [2], Vol. L, May 1890, p. 820.

19) Curzon [6], Vol. I, p. 474.

20) Curzon [6], Vol. I, p. 307 & p. 474.

ペルシア帝国銀行に先んずることわずか1, 2年とはいえ, イランにおける最初の近代的銀行である新オリエンタル銀行の歴史的な意義は軽視されてはならないであろう。

II 取締役会の構成

第1表はペルシア帝国銀行の取締役会の構成についてまとめたものである。以下, これに注釈を加えながら, 背後関係などを明らかにしていくことにしよう²¹⁾。

第1表 ペルシア帝国銀行の取締役

氏名	生没年	在任期間	経歴, 背後関係
Ezekiel, S.		1889-	
Glyn, Geoffrey		1889-	Glyn, Mills, Currie & Co. (ペルシア帝国銀行の London Bankers)
Griffin, Sir Lepel Henry, K. C. S. I.	1838-1908	1889-	イギリスの対アフガン交渉を指揮; Agent Governor-General for Central India (1881-88); Chairman of the East India Association
Hotz, A. P. H.		1889-	Hotz & Son (オランダ系); 南イランでアヘンや絨毯を扱う
Keswick, William, M. P.	1835 [*] -1912	1889-1912	香港上海銀行取締役; Jardine, Matheson & Co. のパートナー
McLean, David	1833-	1889-	オリエンタル銀行; 香港上海銀行上海支店初代支配人; 同ロンドン支店支配人
Reuter, Baron George de		1889-	Julius の次男
Sassoon, Sir Edward, Bart.		1889-	サスーン家
Stewart, H. D.		1889-	Stewart, Thomson & Co.
Buchanan, W. A.			
Coke, Henry	-1913		
Gordon, General Sir Thomas Edward, K. C. B., K. C. I. E., C. S. I.	1832-1914		セポイの反乱(1857-59); アフガン戦争(1879-80); Oriental & Military Sec. Teheran (1889); Military Attaché (1891-93); イラン各地の遊牧民と接触

21) 本節を構成する史料のうち, *The Dictionary of National Biography* および *Who Was Who* より得られたものについては, 煩雑さを避けるため, 出典を記さなかった。

Greenway, C.			
Hawkins, V. A. Caesar		1908-1939	
Jackson, Sir Thomas, Bart.	1841-1915	1903-1915	香港上海銀行横浜支店支配人; 同総支配人 (1876-88, 90-91, 93-1902)
Keswick, Henry, M. P.	1870-1928		香港上海銀行取締役会長; Jardine, Matheson & Co. のパートナー
Mackenzie, Sir George Sutherland, K. C. M. G., C. B.	1844-1910		Gray, Paul & Co.; British India Steam Navigation Co. の取締役; カールーン川踏査; Imperial British East African Co. の専務取締役
Stielow, G.			

〔備考〕 *1834年とするものもある (石井寛治 [16], p. 8).

〔資料出所〕 *Bankers' Magazine* [2]; *Banking Almanac* [3]; Curzon [6], Vol. II, p. 294 & p. 333; *Dictionary of Business Biography*, Vol. IV, p. 892; *The Dictionary of National Biography*; "Imperial Bank of Persia Archives" [14], S 24/1; 石井寛治 [15], 54ページ; McLean [22], pp. 1-2; 岡崎 [27], 79ページ; Rabino [32], pp. 9-12; *Who Was Who* によって作成。

まず、エゼキエル (S. Ezekiel) 以下9人は、1889年9月19日に任命された初代取締役であるが、彼らを指名したのはジュリアス・ロイター、ルーベン・サスーン (Reuben David Sassoon, 1835-1905)、それにグリーンウェル (W. Greenwell) であった²²⁾。ルーベン・サスーンは王室特許状への署名にも名を連ねている²³⁾。サスーン一族がこの銀行に設立以来深くかかわっていたことが、これらのことからうかがえよう。

次に、グリン (Geoffrey Glyn) についてであるが、グリン・ミルズ・カーリ商会 (Glyn, Mills, Currie and Company) はペルシア帝国銀行のロンドン・バンカーズ (London Bankers) であった²⁴⁾。この会社は、その前身のグリン・ミルズ商会 (Glyn, Mills and Company) が帝国オスマン銀行 (Imperial Ottoman Bank) に取締役を送り込むなど、トルコやエジプトの銀行とも関係が深かった²⁵⁾。

第3に、インドやイランに長く滞在し、豊富な現地経験をもつグリフィ

22) "Imperial Bank of Persia Archives" [14], S 24/1.

23) Baster [4], p. 121.

24) *Banking Almanac* [3].

25) Chapman [5], p. 134; Emden [8], p. 101; 岡野内 [24], 123 ページ; [25], 199 ページ; [26], 80 ページ.

(Lepel Henry Griffin, 1838-1908年), ゴードン (Thomas Edward Gordon, 1832-1914年), そしてマッケンジー (George Sutherland Mackenzie, 1844-1910年) の名をあげることができる。

グリフィンはインドの行政官 (Anglo-Indian administrator) で、アフガン戦争に際しては対アフガニスタン交渉を指揮した。

ゴードンはセポイの反乱やアフガン戦争で武功を立てた軍人で、1889年にはテヘラーンに赴任した。彼は公務としてイラン各地を回りクルドその他の遊牧民と接触した。

マッケンジーはグレイ・ポール商会 (Gray, Paul and Company) の社員であった。この会社はイランでアヘンを大量に取り扱っていたという²⁶⁾。

第4に、香港上海銀行 (The Hongkong and Shanghai Banking Corporation) とジャーディン・マセソン商会 (Jardine Matheson and Company) の関係者の名が目立つ。彼らは取締役会の中でかなりの影響力をもっていたものと思われる。このことは、彼らが人数的にある程度の勢力を占めていたということのみならず、ウィリアム・ケズウィック (William Keswick, 1834-1912年) とジャクソン (Thomas Jackson, 1841-1915年) が取締役会長を長い間務めていたということによっても裏づけられよう。

1908年から1915年までの取締役会長ジャクソンは、香港上海銀行の総支配人であった。彼は1866年に香港上海銀行に入行し、横浜支店支配人などを務めた後、35歳のときに総支配人に抜擢された。以後、1902年までのほとんどの期間、総支配人として活躍し、同行史上いわゆる「ジャクソン時代」を築いた有能な人物であった²⁷⁾。

なお、ペルシア帝国銀行は1960年にこの香港上海銀行によって買収されている²⁸⁾。

26) Curzon [6], Vol. II, p. 294 & p. 333; 岡崎 [27], 79 ページ。

27) 石井寛治 [15], 54 ページ; McLean [22], p. 1.

28) Pressnell & Orbell [31], pp. 18-19.

ウィリアム・ケズィックは、設立以来1899年まで取締役会長を務めた²⁹⁾。彼の子ヘンリー（Henry Keswick, 1870-1928年）も取締役であった。父子ともに香港上海銀行とジャーディン・マセソン商会の重職にあったという経歴をもち、また2人とも下院議員に選ばれている³⁰⁾。1984年現在のジャーディン・マセソン商会会長のサイモン・ケズィック（Simon Keswick, 1942- ）はこのヘンリーの孫に当たる³¹⁾。

また、このジャーディン・マセソン商会に関しては、19世紀、同商会がアヘン貿易に大きくかかわっていたということを指摘しておきたい³²⁾。

最後に、このアヘンの問題に関連して、ホッツ（A. P. H. Hotz）とエドワード・サスン（Edward Sassoon）について触れておこう。

ホッツ商会（Hotz and Son）は1874年に設立されたオランダの商会で、シーラーズ、エスファハーン、ブーシェフル、バストラ（Başra）、ソルターナーバード（Solţānābād）に支店を設け、南イランでアヘンを扱っていた³³⁾。

サスン一族は、19世紀、ボンベイ、香港、ロンドンなどを拠点にして、大規模な商業活動を行っていた。特にアヘンに関しては、一時期、「インドにおけるアヘン貿易を独占し」ていたとされる³⁴⁾。その繁栄ぶりは「東洋のロスチャイルド」あるいは「サスン王朝」と形容されるほどであった³⁵⁾。

この一族の発展の基礎を築いたのはデーヴィッド・サスン（David Sassoon, 1792-1864年）という人物である。彼は、1792年、バグダードにてユダヤ教徒の子として生まれ、後にボンベイに移住したが、ボンベイに移る前にはイランのブーシェフルにいた³⁶⁾。「30年代の南イラン（ブーシェフル後背のファールス南部

29) McLean [22], p. 2.

30) *Bankers' Magazine* [2]; *Banking Almanac* [3].

31) 濱下 [13], 5-6 ページおよび 37 ページ.

32) 濱下 [13], 15 ページ; *Dictionary of Business Biography*, Vol. IV, p. 188.

33) Floor [10], p. 188; 岡崎 [27], 79 ページ.

34) 濱下 [13], 15 ページ; *Jüdisches Lexikon*, Bd. IV/2, Sp. 116; *The Jewish Encyclopedia*, Vol. XI, p. 67; *The Universal Jewish Encyclopedia*, Vol. IX, p. 373.

35) Chapman [5], p. 131; Roth [35]; *Jüdisches Lexikon*, Bd. IV/2, Sp. 116; *The Jewish Encyclopedia*, Vol. XI, p. 66.

の山地)では、アヘン生産が進み、プーシェフルに本拠を置く外国商人が多数アヘンの買い付けを行なっており、サスーンもそのうちの1人であった³⁷⁾。

また、彼の長男アブドゥッラー (Albert Abdullah David Sassoon, 1817-1896年) はシャーからシーロ・ホルシード (Shir-o Khorshid) 勲位を授与され、1889年にはヨーロッパ訪問中のシャーを接待している³⁸⁾。

このように、サスーン一族はイランの王室やアヘンと深いつながりをもっていた。

イランのアヘンは台湾をはじめとする東アジアに輸出されていたわけであるが³⁹⁾、その貿易金融の問題についてはほとんど何も解明されていないといつてよい。ロンドンを中心とした多角的貿易決済のネットワークの中にイランを正しく位置づけることが今後の19世紀イラン経済史の課題の1つであろうし、ペルシア帝国銀行を研究する意義も1つにはここにあるものと思われる。その際、サスーンや香港上海銀行などとの関係も視野に入れておかなければならないだろう。

III 展 開

次に、支店および代理店の開設状況と貸借対照表を年次的に跡づけていくことにしよう。

ペルシア帝国銀行の本店 (Chief Office in Persia) はテヘラーンにあった。そして、ロンドンのシティ金融街にはロンドン事務所 (London Office) を設け、イラン国内ならびに近隣諸国に支店または代理店を置いていた⁴⁰⁾。

第2表は『バンキング・アルマナク』に従って支店および代理店の展開をま

36) Sassoon [36], pp. 125-126. 生年を1793年とするものもある (*The Universal Jewish Encyclopedia*, Vol. IX, p. 373).

37) 岡崎 [27], 73 ページ。

38) *Jüdisches Lexikon*, Bd. VI/2, Sp. 116; *The Jewish Encyclopedia*, Vol. XI, p. 67; *The Universal Jewish Encyclopedia*, Vol. IX, p. 374.

39) 岡崎 [27], 79 ページ。

40) *Banking Almanac* [3].

とめたものである。

なお、左側の欄に記されている年次はこの年鑑の号数に相当するものであることに注意したい。たとえば、1893年の右欄に「カルカッタの名あらわれる」

第2表 ペルシア帝国銀行の支店および代理店の展開

発行年*	前号と比べての記述内容の変化
1889	(同行についての記述なし)
1890	(未見)
1891	バグダード、ブーシェフル、エスファハーン、タブリーズ、テヘラーン
1892	バスラ、ボンベイ、マシュハド、シーラーズの名あらわれ、テヘラーンの名消える
1893	カルカッタの名あらわれる
1894	ラシュト、ヤズドの名あらわれ、バグダード、バスラの名消える
1895	変化なし
1896	カルカッタの名消える
1897	変化なし
1898	(同上)
1899	(同上)
1900	(同上)
1901	ボンベイの名消える
1902	変化なし
1903	ケルマーンシャーの名あらわれる
1904	変化なし
1905	ケルマーン、ナスラターバードの名あらわれる
1906	変化なし
1907	(同上)
1908	(同上)
1909	(同上)
1910	(同上)
1911	ハマダーン、モハンマレの名あらわれる
1912	アフヴァーズ、カズヴィーンの名あらわれる
1913	変化なし
1914	ビールジャンド、ソルターナーバードの名あらわれる

〔備考〕 *ここでは便宜上、各号のタイトルに含まれる年(たとえば、*The Banking Almanac, Directory, Year Book and Diary for 1889* の 1889)をもって発行年に代える。

〔資料出所〕 *Banking Almanac* [3] によって作成。

とあるが、これは「1893年号にこういう事実が記載されている」ということであり、「1893年にこういう事実があった」ということではない。ただ、各号とも最新の情報を載せていることなどから判断して、それぞれ、号数の1、2年前の事実と考えて大過ないであろう。

このことに注意した上で、以下、第2表から若干の論点を拾い上げてみよう。1891年号にテヘラーンの名が記されている。これをそのまま受け取れば、当時、テヘラーンには本店以外に支店もあったということになるが、他の史料による裏づけがないこともあり、速断は避けたい。

次に、1894年号でバグダードとパスラの名が消えているが、これは帝国オスマン銀行との合意にもとづくものである。この合意は、帝国オスマン銀行がトルコにおけるペルシア帝国銀行の業務を担当し、一方、ペルシア帝国銀行がイランにおける帝国オスマン銀行の業務を担当するという内容であった⁴¹⁾。

さらに、同行がカルカッタとボンベイで活動していたという点が注目される。もっとも、カルカッタは支店ではなく代理店であった⁴²⁾。ボンベイもおそらく代理店であったものと思う。しかも、カルカッタはすぐに閉鎖されたし、ボンベイも10年ほどで名が消えている。ただし、香港銀行グループ所蔵の史料によれば、ボンベイについては、1900年ごろに閉鎖された後も、インド・ナショナル銀行 (National Bank of India) が当地におけるペルシア帝国銀行の業務を代行 (representation) していたとのことである⁴³⁾。

いずれにしても、ボンベイとカルカッタにおける支店または代理店の存在は、同行と香港上海銀行やサスンとのつながりを示唆するものである。

次に、第3表の貸借対照表の検討に移ろう。

まず、銀行券流通高の問題であるが、1902年度の貸借対照表について『バンカーズ・マガジン』は次のようにコメントしている⁴⁴⁾。

41) *Bankers' Magazine* [2], Vol. LVII, No. 599, Feb. 1894, p. 274.

42) *Bankers' Magazine* [2], Vol. LXI, No. 623, Feb. 1896, p. 305.

43) "Imperial Bank of Persia Archives" [14], V 8.

44) *Bankers' Magazine* [2], Vol. LXXV, No. 706, Jan. 1903, pp. 74-75.

「貸借対照表全体の大きさからすれば、330,493ポンドという銀行券流通高は異常に大きい。このことは、通貨の供給が適切でない国ペルシアにおいて、ペルシア帝国銀行の業務が高く評価されていることの証明である。」

この年度に限らず、この数値は、1899年度に10%台に達して以来、高い数値で推移している。

それでは、他の海外銀行ではどのようなレベルなのか、みてみよう。オリエンタル銀行 (Oriental Bank; Oriental Bank Corporation)、インド・ロンドン・中国・マーカンタイル銀行 (Chartered Mercantile Bank of India, London, and China)、インド・オーストラリア・中国・チャータード銀行 (Chartered Bank of India, Australia, and China)、香港上海銀行の5年ごとの貸借対照表によれば、最高6.6⁴⁵⁾。また、帝国オスマン銀行では最高3.7%である⁴⁶⁾。

これらの数値をみれば、ペルシア帝国銀行の10%から20%、さらには最高29%という数値がいかに高いものであるかが分かるであろう。

ペルシア帝国銀行に対抗してロシアがイランに設立したペルシア手形割引貸付銀行 (Учётно-ссудный банк Персии; Bānk-e Esteqrāzī; Banque d'Escompte de Perse) による多量の銀行券発行⁴⁷⁾や伝統的両替商による正金取り付け⁴⁸⁾などの妨害があったとはいえ、ペルシア帝国銀行の発券業務は、貸借対照表を見る限り、この時期、同行の業務全体の中でかなり大きな比重を占めていたといえよう。

次に、自己資本比率を見ることにしよう。自己資本比率とは資本金と準備金の合計を総資本で割ったもので、この比率が高いほど経営の安定性が高いといえることが、一般的にはいえる。

ペルシア帝国銀行では、この比率は、初年度の64%から低下していき、1899年度に大きく上昇し、それから1914年度までゆるやかに低下するという推移を

45) 石井寛治 [15], 30 ページ, 42 ページ, 49 ページおよび53 ページ。

46) 岡野内 [26], 84-85 ページ。

47) *Bankers' Magazine* [2], Vol. LXXVII, No. 718, Jan. 1904, p. 77.

48) Keddie [20], p. 62.

第3表 ペルシア帝国銀行の

年*	負債						
	資本金	準備金	銀行 流通 券高	預金	支払手形	その他	計
1890	999,748 (55.9)	150,000 (8.4)	...	113,015 (6.3)	458,800 (25.6)	67,863 (3.8)	1,789,426 (100.0)
1891	1,000,000 (47.0)	150,000 (7.0)	28,334 (1.3)	225,233 (10.6)	666,519 (31.3)	58,353 (2.7)	2,128,439 (100.0)
1892	1,000,000 (48.0)	150,000 (7.2)	55,450 (2.7)	356,120 (17.1)	470,533 (22.6)	49,129 (2.4)	2,081,232 (100.0)
1893	1,000,000 (46.4)	100,000 (4.6)	59,106 (2.7)	285,338 (13.2)	679,232 (31.5)	31,721 (1.5)	2,155,397 (100.0)
1894	1,000,000 (52.1)	14,488 (0.8)	95,514 (5.0)	269,161 (14.0)	510,138 (26.6)	30,957 (1.6)	1,920,258 (100.0)
1895	650,000 (46.3)	42,286 (3.0)	72,668 (5.2)	239,164 (17.1)	358,277 (25.5)	40,297 (2.9)	1,402,692 (100.0)
1896	650,000 (33.5)	65,487 (3.4)	82,203 (4.2)	225,877 (11.6)	883,994 (45.6)	32,457 (1.7)	1,940,018 (100.0)
1897	650,000 (41.0)	63,493 (4.0)	38,000 (2.4)	216,803 (13.7)	591,923 (37.3)	24,625 (1.6)	1,584,844 (100.0)
1898	650,000 (31.9)	72,458 (3.6)	72,763 (3.6)	219,676 (10.8)	997,017 (49.0)	23,500 (1.2)	2,035,414 (100.0)
1899	650,000 (56.2)	72,458 (6.3)	117,491 (10.2)	179,580 (15.5)	113,264 (9.8)	23,852 (2.1)	1,156,645 (100.0)
1900	650,000 (47.2)	72,458 (5.3)	206,422 (15.0)	280,758 (20.4)	131,332 (9.5)	36,644 (2.7)	1,377,614 (100.0)
1901	650,000 (45.7)	80,000 (5.6)	264,333 (18.6)	278,264 (19.6)	119,333 (8.4)	29,314 (2.1)	1,421,244 (100.0)
1902	650,000 (42.8)	100,000 (6.6)	330,493 (21.7)	282,390 (18.6)	133,838 (8.8)	23,451 (1.5)	1,520,172 (100.0)
1903	650,000 (43.1)	100,000 (6.6)	346,808 (23.0)	225,439 (15.0)	148,962 (9.9)	35,991 (2.4)	1,507,200 (100.0)
1904	650,000 (34.3)	115,000 (6.1)	480,721 (25.3)	410,519 (21.6)	205,658 (10.8)	33,775 (1.9)	1,997,673 (100.0)
1905	650,000 (32.7)	130,000 (6.5)	526,479 (26.5)	426,117 (21.5)	217,764 (11.0)	36,023 (1.8)	1,986,383 (100.0)
1906	650,000 (32.5)	150,000 (7.5)	460,911 (23.0)	527,460 (26.3)	177,586 (8.9)	35,953 (1.8)	2,001,910 (100.0)
1907	650,000 (29.7)	175,000 (8.0)	395,011 (18.0)	549,048 (25.1)	382,751 (17.5)	37,215 (1.7)	2,189,025 (100.0)
1908	650,000 (29.5)	185,000 (8.4)	430,435 (19.5)	607,936 (27.6)	287,301 (13.0)	41,493 (1.9)	2,202,165 (100.0)
1909	650,000 (26.5)	185,000 (7.6)	634,649 (25.9)	686,541 (28.0)	243,064 (9.9)	49,478 (2.0)	2,448,732 (100.0)

貸借対照表

(単位: ポンド・スターリング、括弧内は百分比)

資 産							
現金	投資	イラン政府への 借款供与	新オリエン タル銀行	割引手形	受取手形	不動産	計
392,288 (21.9)	60,000 (3.4)	40,000 (2.2)	12,000 (0.7)	1,218,557 (68.1)	60,268 (3.4)	6,313 (0.4)	1,789,426 (100.0)
534,685 (25.1)	377,361 (17.7)	36,965 (1.7)	10,000 (0.5)	703,542 (33.1)	454,708 (21.4)	11,176 (0.5)	2,128,437 (100.0)
307,385 (14.8)	230,293 (11.1)	33,748 (1.6)	8,000 (0.4)	1,036,942 (49.8)	447,648 (21.5)	17,214 (0.8)	2,081,230 (100.0)
187,601 (8.7)	373,406 (17.3)	30,338 (1.4)	6,000 (0.3)	900,783 (41.8)	637,917 (29.6)	19,350 (0.9)	2,155,395 (100.0)
184,858 (9.6)	135,900 (7.1)	26,724 (1.4)	4,000 (0.2)	1,072,836 (55.9)	478,535 (24.9)	17,406 (0.9)	1,920,259 (100.0)
141,986 (10.1)	133,020 (9.5)	22,893 (1.6)	2,000 (0.1)	799,726 (57.0)	292,418 (20.8)	10,650 (0.8)	1,402,693 (100.0)
201,029 (10.4)	129,690 (6.7)	18,831 (1.0)	...	1,168,269 (60.2)	410,891 (21.2)	11,309 (0.6)	1,940,019 (100.0)
205,344 (13.0)	125,730 (7.9)	22,129 (1.4)	...	1,020,733 (64.4)	199,402 (12.6)	11,508 (0.7)	1,584,846 (100.0)
197,965 (9.7)	112,680 (5.5)	19,456 (1.0)	...	1,482,525 (72.8)	210,040 (10.3)	12,747 (0.6)	2,035,413 (100.0)
261,725 (22.6)	109,890 (9.5)	16,624 (1.4)	...	627,341 (54.2)	126,304 (10.9)	14,762 (1.3)	1,156,646 (100.0)
239,119 (17.4)	129,262 (9.4)	13,621 (1.0)	...	728,093 (52.9)	253,704 (18.4)	13,813 (1.0)	1,377,612 (100.0)
507,699 (35.7)	142,325 (10.0)	10,439 (0.7)	...	559,948 (39.4)	176,893 (12.4)	23,940 (1.7)	1,421,244 (100.0)
605,955 (39.9)	142,337 (9.4)	7,065 (0.5)	...	545,784 (35.9)	196,692 (12.9)	22,338 (1.5)	1,520,171 (100.0)
733,497 (48.7)	138,379 (9.2)	3,489 (0.2)	...	490,607 (32.6)	118,657 (7.9)	22,571 (1.5)	1,507,200 (100.0)
1,032,344 (54.4)	164,769 (8.7)	570,344 (30.1)	99,877 (5.3)	30,338 (1.6)	1,897,672 (100.0)
639,485 (32.2)	396,404 (20.0)	778,115 (39.2)	140,338 (7.1)	32,042 (1.6)	1,986,384 (100.0)
474,505 (23.7)	404,552 (20.2)	974,582 (48.7)	115,559 (5.8)	32,709 (1.6)	2,001,907 (100.0)
387,093 (17.7)	411,288 (18.8)	1,167,048 (53.3)	189,084 (8.6)	34,512 (1.6)	2,189,025 (100.0)
677,016 (30.7)	202,795 (9.2)	1,168,115 (53.0)	116,726 (5.3)	37,513 (1.7)	2,202,165 (100.0)
892,812 (36.5)	311,900 (12.7)	1,123,645 (45.9)	83,003 (3.4)	37,371 (1.5)	2,448,731 (100.0)

1910	650,000 (23.6)	200,000 (7.3)	683,945 (24.8)	746,853 (27.1)	419,389 (15.2)	52,925 (1.9)	2,753,112 (100.0)
1911	650,000 (21.3)	210,000 (6.9)	805,133 (26.3)	775,792 (25.4)	559,495 (18.3)	57,426 (1.9)	3,057,846 (100.0)
1912	650,000 (21.6)	210,000 (7.0)	859,064 (28.6)	725,009 (24.1)	499,385 (16.6)	60,964 (2.0)	3,004,422 (100.0)
1913	650,000 (19.7)	210,000 (6.4)	962,419 (29.1)	905,994 (27.4)	514,501 (15.6)	62,113 (1.9)	3,305,027 (100.0)
1914	650,000 (21.0)	210,000 (6.8)	832,011 (26.8)	695,367 (22.4)	671,803 (21.7)	43,358 (1.4)	3,102,539 (100.0)

〔備考〕 9月20日の期末決算。

〔資料出所〕 “Imperial Bank of Persia Archives” [14], S 15 によって作成。

示しているが、レベルとしては、1904年度までは大体40%以上の数値を維持していた。

この水準自体は決して低いものではない。イラン国内の混乱や銀価低落問題などの当時の困難な状況を考え合わせれば、このような高い自己資本比率は同行の経営努力を示しているようにも思えるが、現在の研究段階では断定的なことはいえない。

おわりに

ペルシア帝国銀行の全体像の解明を目指す試みの出発点として、本稿では、取締役会の構成や支店および代理店の展開などの基本的史料を検討したわけであるが、その結果、いくつかの興味深い論点を見いだすことができた。

なかでも、同行とサスーン一族、ジャーディン・マセソン商会、それに香港上海銀行とのつながりを確認できたことは、筆者自身の問題意識からすれば、今後の研究の方向を示唆するものであった。

ここでは、このつながりは、主として取締役会での人脈的つながりというレベルでしか捉えることができなかった。したがって、ここで確認された人脈的つながりの背後にあるであろうところの貿易金融などの具体像を明らかにすることが今後の研究課題の1つとしてあげられよう。

また、本稿で論じることができなかったイラン政府の借款の問題は、同行に

776,032 (28.2)	354,952 (12.9)	1,426,956 (51.8)	152,294 (5.5)	42,878 (1.6)	2,753,112 (100.0)
934,478 (30.6)	677,103 (22.1)	1,150,093 (37.6)	245,485 (8.0)	50,686 (1.7)	3,057,845 (100.0)
1,340,843 (44.6)	677,035 (22.5)	723,782 (24.1)	209,634 (7.0)	53,128 (1.8)	3,004,422 (100.0)
1,220,602 (36.9)	663,085 (20.1)	1,125,173 (34.0)	240,859 (7.3)	55,308 (1.7)	3,305,027 (100.0)
1,088,066 (35.1)	631,842 (20.4)	1,127,669 (36.3)	203,128 (6.5)	51,834 (1.7)	3,102,539 (100.0)

とって決定的重要性をもつものであり、今後の研究の進展が要請される。

さらに、ペルシア手形割引貸付銀行や伝統的両替商との関係の究明など、残された課題は多いが、これらについての考究は別の機会に発表することにした。

【参考文献】

- [1] Avery, Peter W. and J. B. Simmons, "Persia on a Cross of Silver, 1880-1890," in Elie Kedourie and Sylvia G. Haim, eds., *Towards a Modern Iran: Studies in Thought, Politics and Society*, London: Frank Cass, 1980, pp. 1-37.
- [2] *Bankers' Magazine*.—
- ① *The Bankers' Magazine, Journal of the Money Market, and Commercial Digest*, London: Waterlow, 1889.
 - ② *The Bankers' Insurance Managers' and Agents' Magazine*, London: Waterlow, 1890.
 - ③ *The Bankers' Insurance Managers' & Agents' Magazine*, London: Waterlow, 1891-1914.
- [3] *Banking Almanac*.—
- ① *The Banking Almanac, Directory, Year Book and Diary*, ed. R. H. Inglis Palgrave, London: Waterlow, 1889, 1891-1897.
 - ② *The Banking Almanac*, ed. R. H. Inglis Palgrave, London: Waterlow, 1898-1914.
- [4] Baster, Albert Stephen James, *The International Banks*, London, 1935;

- riprint, New York: Arno, 1977.
- [5] Chapman, Stanley D., *The Rise of Merchant Banking*, London: George Allen & Unwin, 1984.
- [6] Curzon, George Nathaniel, *Persia and the Persian Question*, 2 Vols. 1892; second impression, London: Frank Cass, 1966.
- [7] Diplomaticus, "The Imperial Bank of Persia," *The Asiatic Quarterly Review*, Vol. VIII, Oct. 1889, pp. 241-256.
- [8] Emden, Paul Herman, *Money Powers of Europe in the Nineteenth and Twentieth Centuries*, London: Sampson Low, Marston, 1937.
- [9] Feis, Herbert, *Europe: The World's Banker; An Account of European Foreign Investment and the Connection of World Finance with Diplomacy before the War*, 1930; reprint, New York: Augustus M. Kelley, 1964.
- [10] Floor, Willem M., "Hotz versus Muḥammad Shafti: A Case Study in Commercial Litigation in Qājār Iran, 1888-1894," *International Journal of Middle East Studies*, Vol. XV, No. 2, May 1983, pp. 185-209.
- [11] "Foreign Office Records," Public Record Office, London.
- [12] Frechtling, L. E., "The Reuter Concession in Persia," *The Asiatic Review*, Vol. XXXIV, No. 119, Jul. 1938, pp. 518-533.
- [13] 濱下武志「香港——ジャーディン・マセソン商会の歴史と現状——」米川伸一・小池賢治編『発展途上国の企業経営——担い手と戦略の変遷——』アジア経済研究所, 1986, 所収, 3-50ページ。
- [14] "Imperial Bank of Persia Archives," Hongkong Bank Group.
- [15] 石井寛治「イギリス植民地銀行群の再編——1870・80年代の日本・中国を中心に——」『経済学論集』(東京大学)第45巻第1号, 1979年4月, 19-60ページ; 同第3号, 10月, 17-46ページ。
- [16] _____, 『近代日本とイギリス資本——ジャーディン・マセソン商会を中心に——』東京大学出版会, 1984年。
- [17] 石井摩耶子「19世紀後半の中国におけるイギリス資本の活動——ジャーディン・マセソン商会の場合——」『社会経済史学』第45巻第4号, 1979年12月, 1-33ページ。
- [18] Issawi, Charles, *The Economic History of Iran, 1800-1914*, Chicago: University of Chicago Press, 1971.
- [19] Иванов, Михаил Сергеевич, отв. ред., *История Ирана*, Москва: Издательство Московского университета, 1976.
- [20] Keddie, Nikki R., *Roots of Revolution: An Interpretive History of Modern*

- Iran*, New Haven: Yale University Press, 1981.
- [21] McLean, David, *Britain and Her Buffer State: The Collapse of the Persian Empire, 1890-1914*, London: Royal Historical Society, 1979.
- [22] _____, "International Banking and Its Political Implications: The Hongkong and Shanghai Banking Corporation and the Imperial Bank of Persia, 1889-1914," in Frank H. H. King, ed., *Eastern Banking: Essays in the History of The Hongkong and Shanghai Banking Corporation*, London: Athlone, 1983, pp. 1-13.
- [23] Nayyeri, Mostafa, *Das Bankwesen im Iran und seine Entwicklung*, diss. Köln 1964, Köln: Photostelle der Universität zu Köln, 1964.
- [24] 岡野内 正「バンク・オブ・エジプトについての覚書」『経済学論叢』（同志社大学）第33巻 第1号，1983年12月，119-138ページ。
- [25] _____, 「オットマン・バンクについての覚書」『経済学論叢』（同志社大学）第34巻 第3・4号，1984年8月，196-210ページ。
- [26] _____, 「インペリアル・オットマン・バンクについての覚書」『経済学論叢』（同志社大学）第35巻 第1号，1984年12月，75-104ページ。
- [27] 岡崎正孝「19世紀イランにおけるケン作の進展」『経済研究』（一橋大学）第31巻 第1号，1980年1月，72-80ページ。
- [28] _____, 「ペルシア語のカナ表記法——試案——」『シンポジウム「中東の社会変化とイスラムに関する総合的研究」——報告と討論の記録——5. イラン分科会』国立民族学博物館，1980年，所収，60-104ページ。
- [29] _____, 「イスラム世界とその呼称」勝藤猛・内記良一・岡崎正孝編『イスラム世界——その歴史と文化——』世界思想社，1981年，所収，2-5ページ。
- [30] _____, "The Great Persian Famine of 1870-71," *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, Vol. XLIX, Part 1, Feb. 1986, pp. 183-192.
- [31] Pressnell, L. S., and John Orbell, *A Guide to the Historical Records of British Banking*, Aldershot, Hants: Gower, 1985.
- [32] Rabino, Joseph, "Banking in Persia," *Journal of the Institute of Bankers*, Vol. XIII, Part 1, Jan. 1892, pp. 1-56.
- [33] _____, "An Economist's Notes on Persia," *Journal of the Royal Statistical Society*, Vol. LXIV, 1901, pp. 265-291 & p. 530.
- [34] Ronall, Joachim O., "The Beginnings of Modern Banking in Iran," in Karl-Heinz Manegold, ed., *Wissenschaft Wirtschaft und Technik: Studien zur Geschichte*, München: Bruckmann, 1969, pp. 255-263.
- [35] Roth, Cecil, *The Sassoon Dynasty*, London: Robert Hale, 1941.

- [36] Sassoon, David Solomon, *A History of the Jews in Baghdad*, Welwyn Garden City, Herts.: Alcuin, 1949.
- [37] Teymūri, Ebrāhīm, ‘*Aṣr-e Bikhābari: Tārīkh-e Emtiyāzāt dar Īrān*, Tehrān: Eqbāl, 1332 Hejri [-ye Khorshīdi] (1953-1954 A. D.).
- [38] Vaid, K. N., *The Overseas Indian Community in Hong Kong*, Hong Kong: University of Hong Kong, 1972.
- [39] Yaganegi, Esfandiar Bahram, “Recent Financial and Monetary History of Persia,” diss. Columbia 1934.